政大日本研究【第十八號】
2021年1月，頁219～251
10.30379/CJJS.202101_(18).0009

日本と東アジアの言語の特徴としての代名詞省略
—主観的把握における異同とその周辺—

上原　聡[1]

１．はじめに

「漢字文化圏」と必ずしも一致するわけではないが、それを中心としたより広い地域の名称として「東アジア文化圏」というものがある。その地域の言語に共通しまた特有であると言える言語の特徴はあるのか。そしてそのような言語の特徴は、東アジアの言語の話者のどのような捉え方の傾向を表すと考えられるのだろうか。

東アジアの言語の共通点と言っても、日本語と中国語だけを取り上げても異なっている点ばかりが目立つ。例えば、語順類型では、動詞(V)とその目的語(O)の典型的な語順が正反対である。

日：「ご飯を食べる」(OV)　中：「吃飯」(VO)

形態類型においても、日本語は膠着型言語とされ述語の活用形があるのに対して、中国語は孤立型言語とされ述語に活用がない。

日：「飲む」/「飲んだ」　　中：「喝」/「喝了」

このような多様な東アジアの言語にもその多くに共通の特徴が存在し、その一つとして、代名詞省略がある。それを取り上げ、言語類型論的なアプローチによりその明確な定義づけをするとともに、それが東アジアの言語に特有な特徴であることを示す。

東アジア言語の間には、代名詞省略を共通の特徴としながらも、その代名詞省略のパターンと頻度において異同がある。本稿ではその差異を日中語の対照言語学的ケーススタディーを通して明らかにした上で、その差異の動機づけとなる日本語の文法構造上の特徴を明らかにする。さらに、共通点と同様、東アジア言語間のその相違点にその言語の話者のどのような捉え方の傾向を表すと考えられる

[1] 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 兼 大学院国際文化研究科 教授

のかについて、認知言語学の事態把握の観点から考察する。

日本語の代名詞省略を動機づけるその事態把握の傾向は、日本語の特有とされる他の言語現象や表現パターンの動機づけの要因となっていることを示す。

２．言語類型論的アプローチ

2.1　日本語を含む東アジア言語の共通の特徴としての代名詞省略

東アジアの言語の共通の特徴と言っても、その特徴が東アジア以外の世界の他の地域の言語にも同じものが見られるのであれば、東アジアの言語の特徴とは言えないのではないか。そこで、まず東アジアの言語と他の地域の言語との相違点に注目した。東アジアの言語である日本語と英語の顕著な相違点の一つとしてよく取り上げられるのが、代名詞省略の有無である。両言語の代名詞の例を挙げておこう：

	一人称	二人称	三人称
日本語：	私、	あなた、	彼、彼女、
英語：	I,	you,	he, she,,,

両言語の代名詞には、形態の格変化の有無（英：I/me）、語用論的な異形式の有無（日：「私」「僕」他）など他の違いもあるが、ここでは代名詞省略の有無に注目したい。つまり、日本語の代名詞は、英語とは異なり、文脈からその指示対象が明らかな場合は省略できる／非明示にできるという特徴である。

この点は、以下の引用に見ることができる。以下は、英語原作の小説（O. Henry (1905) “The Last Leaf”）の主語代名詞がその日本語対訳小説においてどのような形式に対応しているかを調査したケーススタディ Uehara(1998)からの引用で、作中登場人物 Old Behrman／ベアマン老人についての記述部分の段落である（文中の主語代名詞を表す太文字、その和訳対応形式を示す括弧書きは上原による）。

> Old Behrman was a painter who lived on the ground floor beneath them. **He** (ø) was past sixty and had a Michael Angelo's Moses beard curling down from the head of a satyr along the body of an imp. Behrman was a failure in art. Forty years **he** (ø) had wielded the brush without getting near enough to touch the hem of his Mistress's robe. **He** (ø) had been always about to paint a masterpiece, but had never yet begun it. For several years **he** (ø) had painted nothing except now and then a daub in the line of commerce or advertising. **He** (彼は) earned a little by serving as a model to those young artists in the colony who could not pay the price of a professional. **He** (ø) drank gin to excess, and still talked of his coming masterpiece. For the rest **he** (彼は) was a fierce little old man, who scoffed terribly at softness in any one, and who regarded himself as especial mastiff-in-waiting to protect the two young artists in the studio above.

上記引用では、１段落中７回使用されている英語代名詞 he のうち、和対訳では日本語代名詞「彼」となっているのは２回のみで、５回は省略形／非明示となっている。このように日本語では、英語で代名詞で表す指示対象が先行文脈から明らかな場合には、省略しても差し支えないのである。

この代名詞省略の特徴は、日本語だけでなく東アジアの多くの言語においても共通して見られることが知られている。中国語の例を見てみよう。(1)は、風邪気味の A を世話する B が「A は元気になったか？薬はちゃんと飲んだか？」と聞かれて答える場面である。

(1)　Ｂ：明明 吃藥了，卻 沒有變好。
　　　「薬を飲んだのに、全然良くならない。」

もちろん、(1)の例で会話の主題である A を「他」で明示することも自然であるが、英語のように代名詞の使用が義務的ではない。

上記引用した英語小説の漢語訳（王聖棻・魏婉琪（訳）(2018)

歐亨利「最後一片葉子」[2]）の上記引用と同じ部分を例に、これを見てみよう。

> Old Behrman was a painter who lived on the ground floor beneath them. **He** (他) was past sixty and had a Michael Angelo's Moses beard curling down from the head of a satyr along the body of an imp. Behrman was a failure in art. Forty years **he** (ø) had wielded the brush without getting near enough to touch the hem of his Mistress's robe. **He** (他) had been always about to paint a masterpiece, but had never yet begun it. For several years **he** (ø) had painted nothing except now and then a daub in the line of commerce or advertising. **He** (他) earned a little by serving as a model to those young artists in the colony who could not pay the price of a professional. **He** (ø) drank gin to excess, and still talked of his coming masterpiece. For the rest **he** (他) was a fierce little old man, who scoffed terribly at softness in any one, and who regarded himself as especial mastiff-in-waiting to protect the two young artists in the studio above.

英語原作の代名詞 he の使用７件のうち、３件に省略が見られる。日本語の場合とは省略の度合は異なるが（この点については後述）、日本語と同様、省略可能であることがわかる。

2.2 いわゆる代名詞省略の２種類

一般言語学では、代名詞省略と言っても、特に主語位置にある代名詞が省略される言語が多く見られることが知られている。そして、そのような省略された代名詞主語を「空主語」（null subject）、その空主語が可能な言語を「空主語言語」と呼ぶことがある。本稿の東アジアの言語の代名詞省略も、主語の位置の代名詞の省略が可能であるため、他の地域にも存在する空主語を許す言語と同様、空主語言語である。（また、東アジアの代名詞省略を世界の他の地域の言語の代名詞省略との通言語的な対比を行うため、以下では主語の位置の代名詞の省略を中心に考察する。）後述の Libeiro （2020） の世界の 403 言語についての調査によると、世

[2] 同小説の漢語訳には、台湾で最も最近に翻訳された同翻訳を採用した。他にも台湾の小学校の教科書に掲載されているものがあるが、小学生用に易しく書き換えたり省略した部分があった。

界の空主語言語の数はそのうち362言語にものぼるとしている。

世界の空主語言語を分類すると、言語類型論では大きく分けて以下の2種類に分類できることが知られている。以下の「一致」(agreement)とは、述部形態における主語の人称・数・ジェンダーなどの標示である（例：英語現在時制で主語の三人称単数を表す-(e)s (like-s)）。

１）述語動詞形に「一致」のある空主語言語

（例：スペイン語、ポルトガル語）

２）述語動詞形に「一致」のない空主語言語

（例：中国語、日本語）

それぞれを簡単に見ておこう。

2.2.1 述語動詞形に「一致」（主語の人称・数・ジェンダーの標示）のある空主語言語：

このタイプの言語の一つ、ポルトガルの例を以下に挙げる：

(2) (Eu) Com-i amêndoas.
（私）食べる-1単過 アーモンド
「私はアーモンドを食べた。」

上記ポルトガル語の文で、１人称代名詞の Eu は省略できる、つまり Com-i amêndoas.だけで文として成立する。しかし、述語動詞の com-i の形態は、動詞の過去時制を表すとともに主語の人称と数（この場合は、1人称単数）を示すため、省略された主語が eu であることは復元可能である。（この一致の形態を有することが主語代名詞の空主語化の要因となっているということができよう(Libeiro 2020)。）

ポルトガル語の活用語尾のパラダイムの例として、規則動詞 gostar「好きである／好む」の現在形活用語尾を表1に示す。

表１：ポルトガル語の規則動詞 *gostar* の現在形活用語尾

	単数		複数	
１人称	*eu*	*gost-o*	*nós*	*gost-amos*
２人称	*tu*	*gost-as*	*vós*	*gost-ais*
３人称	(男性) *ele* (女性) *ela*	*gost-a*	*eles* *elas*	*gost-am*

表１が示すように、述語動詞の形態が３（人称）×２（数）の６つに分かれており、ポルトガル語では（３人称の場合の性まではわからないが）空主語の文であっても主語の人称と数については形態的に明確に示されていると言うことができる。

2.2.2　述語動詞形に「一致」（主語の人称・数・ジェンダーの標示）のない空主語言語

対照的に、第２のタイプの空主語言語は、述部形式に第１のタイプのような主語の人称や数を示す形態がないにもかかわらず、主語代名詞が省略される言語である。よって、非明示の代名詞の復元には文脈が必要であり、上述の日本語や中国語はこのタイプの言語である。このことは、以下の(3)に示すように同じ述語形態で、文法的には主語はどの人称の代名詞でも可能ということである（括弧は省略可能であることを示す）。

(3)　日：　（私は／あなたは／彼は）もうご飯を食べた。
　　　中：　（我／你／他）吃了飯。

(1)に挙げた３人称他者の容態を問う質問に答える主語省略文（台湾華語）の例も、別の文脈で他の人称の代名詞も可能である。

(4)　(我／他)　明明 吃藥了，卻 沒有變好。
「(私は／彼は)薬を飲んだのに、全然良くならない。」

以上のように空主語言語を2種のタイプに分けて考えると、本稿で日中語を例に見てきた東アジア言語の代名詞省略は、第2種のタイプの空主語言語に見られる現象であることがわかる。それでは、このタイプの代名詞省略は、東アジアの言語に特有のものと言えるであろうか。その疑問に答えるため、次節ではLibeiro (2020)の類型論研究のデータベースを参照する。

Libeiro (2020)は、世界の言語における空主語の有無と述語動詞の一致の形態的区別の数との相関性を調べるため、類型論的(系統的・地域的)に偏りのない世界の403言語のデータベースを構築し、通言語的なパターンの検証を行ったものである[3]。同研究は一致のある言語に焦点を当て地域的に偏りのない通言語的普遍性の検証を行っているが、本稿では、その記述及びデータベースにおける空主語言語(362言語)に焦点を当て、それらの言語の一致の有無に地域的な偏りが見られるかを調べることにする。表2は、Libeiro (2020: 87)の Table 3.5 から該当する数値を取り出し、割合及び統計的操作の結果を加えたものである。

表2：世界の空主語言語の数(362言語)とその地域的分類

動詞形態の主語標示	無し	有り	合計
Africa	3 (5.4%) ** ▽	53 (94.6%) ** ▲	56 (100%)
Eurasia	34 (35.8%) ** ▲	61 (64.2%) ** ▽	95 (100%)
Papunesia	17 (25.4%) ns	50 (74.6%) ns	67 (100%)
Australia	11 (29.7%) ns	26 (70.3%) ns	37 (100%)
North America	3 (5.4%) ** ▽	53 (94.6%) ** ▲	56 (100%)
South America	5 (9.8%) *	46 (90.2%) *	51 (100%)
合計	**73 (20.2%)**	**289 (79.8%)**	**362 (100%)**

[3] データベースにある言語名および各言語のデータの詳細、また空主語言語であるかどうかの基準、一致の有無の基準等の詳細は、紙幅の都合のため Libeiro (2020)を参照されたい。

（x2(5)=36.292、*p<.05、**p<.01 ）（▲有意に多い，▽有意に少ない， p<.01）

表２から、空主語言語が世界６つの言語地域全てに広く見られるが、そのうち一致のない言語の割合がEurasia（ユーラシア）に最も多いことがわかる。上記データを、統計的手法を用いてカイ二乗検定（Chi-squared test）にかけて言語の偏りを見ると、Eurasiaの言語地域だけが、p<.01の有意水準で「動詞形態の主語表示無し」が有意に多いということが示される。

上の Libeiro (2020)の研究では、Eurasia が一つの言語地域となっているが、その「動詞形態の主語標示無し」の 34 言語の内訳をその記述を基にさらに調べると、コーカサス地方で話されるレズギ語の１言語を除く 33 言語は全てインド以東の、東南アジアを含む東アジアの言語であった。つまり、「空主語言語でありながら動詞形態の主語標示無し」の傾向は、東アジアの言語においては他の地域に比して極めて強いということができる。

以上のことから、「述部一致なしの代名詞省略」は、特有かつ典型的に見られ、東アジア言語を特徴づける言語現象（の一つ）と言えよう。この点を、空主語のない言語の類型も加え、ヨーロッパと東アジアの言語を例に見ると表３のようになる。

表３：空主語と一致の有無の４タイプのユーラシア言語代表例

	動詞形態の一致なし	動詞形態の一致あり
(主語)代名詞省略あり	中国語、韓国語、日本語、タイ語	イタリア語、スペイン語
(主語)代名詞省略なし	スウェーデン語、ノルウェイ語	英語、フランス語、ドイツ語

では、この「代名詞の省略」＋「述部人称の区別なし」という特徴は、東アジアの言語圏の文化や言語話者の認知傾向にどのような関わりがあるであろうか。次の２点を挙げたい。１点は、代名詞指

示においても東アジアの言語は文脈依存型であり、その文化は高文脈文化(high-context cultures)に類型化されるということである(Hall 1976)[4]。もう1点は、本稿の主張であるが、このタイプの言語の話者は、事態の概念化において人称の区別を明確にはしていないのではないかという点である。

後者の点は、これまでの議論と上記表3から推定できる。指示対象の人称を明示する代名詞は、その明示・言語化が必須である言語（表3下段の2タイプ）は、その言語の話者が代名詞の正しい形態の選択に常に人称の区別を意識している必要がある。これは、代名詞省略はしても述部に人称を明示する言語（表3上段右のタイプ）も同様である。表現する事態の登場人物の人称を意識していなければ、正しい述部形態の選択できない。つまり、以上の3タイプの言語は、出来事の概念化・言語化の際に使用する言語に人称の区別が刻印されているのである。対照的に、東アジア言語に特徴的な代名詞明示の義務性も述部形態の一致もない言語（表3上段左のタイプ）は、出来事の概念化・言語化に人称の区別が意識化されなくてもよい。

このように特徴付けられる東アジアの言語間の相違点は何か。次節でそれを考察する。

３．対照言語学的アプローチ

3.1　東アジア言語間の異同

「人称の区別がないながら代名詞の省略がある」というのが東アジアの言語の特有で共通の特徴だとして、その言語間の異同はないかを考えると、同じ代名詞省略でもその省略の度合に差があるということが指摘できる。これには多くの先行研究があり、ここでは2点のみ紹介する。

[4] 高・低文脈文化の類型は、米国の文化人類学者 Hall がその著作で世界中の言語コミュニケーションの型を高文脈文化と低文脈文化に分類したことに始まる。

日中対訳に主語表示の差異を調べた盛（2006）は、『雪国』の日本語原文と中国語、英語訳の冒頭から 40 前後の文の構造上主語の形態を比べ「日本語では主語ゼロ表示の文が英語や中国語より遥かに多く、［略］、中国語はどちらかというと英語に近く」（p. 60）主語が言語化されることが多いと述べている[5]。

Shibatani（1990）は類型論的な立場から代名詞省略の下位分類について言及している。特に会話の場の参与者（話者と対者）の代名詞が先行文脈で言語化されていない場合でも省略される度合について、「日本語（とおそらく韓国語）は極端に高い。なぜなら他の中国語やフィリピン諸語では、代名詞省略は殆ど先行文脈に指示対象が明示されている場合に限られるからである」（p. 363［上原訳：括弧は原文のまま］）と述べている。すなわち以下のような分類・度合の差となる：

省略：　日本語（、韓国語）　＞　中国語、フィリピン諸語

Shibatani（1990）は、その両タイプの差を表す明示的な例として、日本語では全く問題のない、恋人に愛を囁く時の言葉「愛してるよ」が、同じ状況で中国語やフィリピン諸語に直訳することが不可能であることを挙げている（日本語：「愛してるよ。」、中国語：×「愛。」）[6]。

ここでは、日中語の異同を知るためのケーススタディとして、Uehara（1998）が英語短編小説の全ての主語代名詞の日本語対訳での対応表現を調査した結果（表４）と、同小説の中国語（台湾華語）訳の対応表現を調査した結果（表５）を対照する。［表中「相同」は対訳でも代名詞の場合、「置換」は代名詞以外の名詞である場合、「省略」はゼロ表示の場合である。］

5 盛（2006）では主語ゼロ表示をもって「主観的把握」と結論づけているが、本稿も後述する「主観的把握」と立場が異なる。

6 因みに、他の東アジアの言語では、韓国語は日本語と同様で可能（「사랑해.」（愛してる））、タイ語は形態類型上は中国語と同じ孤立型言語に分類されるが、中国語とは異なり可能である（「Rak na」（愛してる+よ））。

表４：「The Last Leaf」＝＞日本語「最後の一葉」

	I	we	you	he	she	it	they	合計
相同	21	0	6	3	4	1	1	36
置換	0	0	0	5	7	2	4	18
省略	22	3	11	11	14	13	4	78
合計	43	3	17	19	25	16	9	132

表５：「The Last Leaf」＝＞台湾華語「最後一片葉子」

	I	we	you	he	she	it	they	合計
相同	40	2	14	13	18	4	5	96
置換	0	0	1	1	1	6	1	10
省略	3	1	2	5	6	6	3	26
合計	43	3	17	19	25	16	9	132

表４と表５の比較により、台湾華語は、日本語との対照的観点から次の点が明らかに：

１）日本語より省略の度合が少ない（19.7%vs.59.1%）

２）特に１人称代名詞の省略が少ない（I：7.0% vs. 51.2%、he/she：25.0% vs.56.8%）

上記２）の人称による代名詞省略の度合の差に関連して、Uehara （1998）では、英語原作の代名詞が対応する日本語対訳で省略される要因には次の２つがあるとしている：

ア）談話的要因：先行文脈で言語化／明示化されていることによりその指示対象が談話上際立ちが高いため省略される［主に三人称代名詞が省略される要因］

イ）主観性要因：直示表現など事態への表現主体の関わりを示す表現の存在により表現主体を指示する代名詞が省略される［主に一人称代名詞が省略される要因］

今回のケーススタディでは、特に一人称代名詞の省略の度合に差

が見られるため、上記イ）の点、すなわち一人称代名詞の省略の要因となる文法形式・表現について日本語に特徴的に見られるかを考察する。以下の３つのタイプを取り上げる（Uehara 2006b）。

１）内的状態述語　２）直示移動表現　３）「知覚者抜き」記述

3.2　話者非明示のための表現

3.2.1　内的状態述語

「内的状態述語」（Iwasaki 1995)というのは、人の内的状態（感情・感覚・意図・思考）を表す述語表現（動詞や形容詞）であるが、日本語の内的状態述語には「体験者・概念化者一致制約」（上原 2015）（以後「体験者制約」）がある[7]。つまり、その基本形式はその状態の体験者自身の発言にのみ使用可能で、話者が他者の内的状態を表すには何らかのモダリティー形式を伴う。よって、基本形式であれば、一人称代名詞の主語が明示されていなくとも、発話者自身の内的状態を表すことがわかるのである。

(5)　日本語：　私は嬉しい。
　　　　　　　彼は［×嬉しい/嬉し<u>そうだ</u>/嬉し<u>がっている</u>］。
　cf.中国語：　我很高興。
　　　　　　　他很高興。

対照的に、中国語の内的状態述語「高興」は、そのような制約がないため、「很高興」だけでは文法的に主語代名詞が「我」かどうかわからず、「我」の明示の必要性が高い。

(6)　很高興。　＝＞（我?／他?）很高興。

---

[7] 一般に「(一)人称制限」（Kuroda 1973）と呼ばれることが多い。上原(2015)は、疑問文・複文・(小説等の)非報告体(‘non-reportive mode’：Kuroda 1973)における内的状態述語の用法を統一的に説明する特徴づけとして「体験者・概念化者一致制約」としている。なお、韓国語の内的状態述語にも同様の制約が見られる（上原 2011、他）。

The Last Leaf を使ったケーススタディ（英語=>日本語・台湾華語）からの実例を以下の(7)ー(10)に引用する［代名詞主語の下線は筆者による］。

意図：

(7)（英語）I will do all that science, ..., can accomplish.

（日本語）まあ、わしの力のおよぶかぎり、あらゆる療法をほどこしてみよう。

（台華語）我會盡我所能，只要是科學能達成的，我都會去做。

欲求：

(8)（英語）I want to see the last one fall ....

（日本語）最後の一葉が落ちるのを見たいわ。

（台華語）因為我想看著最後一片葉子落下來。

思考：

(9)（英語）Behrman, his name is - some kind of an artist, I believe.

（日本語）ベアマンという名の男で――絵描きだろうと思うがね。

（台華語）另一個病人、叫貝爾曼――我相信他也是某一類的芸術家。

以上のように、東アジア言語内の日中語を例に、一人称代名詞の省略の度合の差の要因となる、内的状態述語の文法的な違いとして体験者制約について見てきたが、そのより正確かつ詳細な理解のため、次の２点に注意したい。

ア）ここでいう内的状態述語の体験者制約というのは、各言語の内的状態述語におけるその制約を持つ語彙の数の多さ、程度の問題である。

確かに中国語の「高興」のような内的状態述語は、対応する日本語の「嬉しい」のような体験者制約はないが、楊凱栄、葉秉杰（個人間話）によると、中国語の「癢」は日本語の「かゆい」と同じ

で、他人には使えない。つまり「他很高興」や「他很痛」はいいが、「他很癢」は不可ということである。

イ）日本語に、内的状態述語の体験者制約を外す構文があり、中国語に、内的状態述語に体験者制約を付加する構文がある。よって、両言語の内的状態述語の違いは、体験者制約が語彙的に（語彙の無標の形式で）あるいは有標の構文で現れるかということである。

木村(1991)、王(2008)は、中国語の「高興」は、日本語の「嬉しい」と異なり「很」を伴って体験者制約がないが、表出副詞「真」を伴う場合には、体験者制約が成立するとしている。つまり、三人称「他」を主語にとれない。また、「真」構文を使うと、日本語の内的状態述語と同様に主語が明示されていなくても良い。

(10) a.　看見我、他很高興
　　b.　＊他真高興！
　　c.　嘿、真高興！

さらに、認知動詞の思考内容として用いることができない：

(11) ＊嘿、我覚得／感到真高興！（王 2008: 41）

以上の点は、中国語の内的状態述語は「真」を伴った形で使用すると、日本語のそれが無標で示すのと同等・近似の体験者制約を持つ対応表現になると言うことができる。

これに関連して考えると、日本語の内的状態述語にもその体験者制約を外す構文形式がいくつか存在し、いわゆる「のだ」構文はその一つである（Kuroda 1973）。

(12) 私は嬉しい。　＋　「のだ」　＝＞　私は嬉しいのだ。
　　＊彼は嬉しい。＋　「のだ」　＝＞　彼は嬉しいのだ。

以上の点から、日本語と中国語の「内的状態述語」について、その文法現象上の大まかな対応関係を次のように表すことができる。

表６　日中語の内的状態述語とその体験者制約

	体験者制約あり（主語代名詞省略の要因）	体験者制約なし（主語代名詞明示の要因）
日本語の内的状態述語	無標（基本形）	有標（基本形＋「のだ」）
中国語の内的状態述語	有標（「真」＋基本形）	無標（基本形）

つまり両言語ともに、内的状態述語に特有の体験者制約があり一人称主語省略の要因となる形式（これを王(2008)は、一般の「描写」の形式に対して「表出」の形式と呼ぶ）が存在する。しかし、日本語ではそれが語彙的に基本形・無標で現れ、中国語ではそれが語彙の基本形にはなく有標で特別な（表出の）場面において現れるという違いがあるということである。このことは、両言語の（主語）一人称代名詞省略の度合の差をもたらす要因の一つになっていると言えよう。

上の表は、さらに、日中両言語でともに辞書に掲載されていて直訳で対応する同じ意味とされる語彙は、必ずしも同じ意味ではなく、少なくともニュアンス／意味合いが異なるということを示している。後、III 節以降では、言葉の「意味」を言語主体の「捉え」を表すものとする認知言語学の考え方を援用する。

3.2.2　直示移動表現「来る」・「くれる」

前節で東アジア言語の代名詞省略は主語の位置にあるものだけではないと述べたが、諸語以外の代名詞の省略の度合の差の要因となる文法形式もある。その例として直示移動の表現を見ておく。「行く」／「来る」は、移動が話者へ向かう方向の時に「来る」、それ以外の方向の時に「行く」を用いるのが基本である。「来る」のない言語、つまり代わりに「移動する」という意味の動詞を使用する

言語（例：ロシア語）の場合、一人称代名詞「私」や話者の場所を表す「ここ」を使わざるを得ない。

(13)　「太郎が来た！」　＝＞　「太郎が［私のところに／ここに］移動した！」

よって、ある言語において、直示移動動詞「来る」を有しそれが使用される頻度に応じて一人称代名詞の省略が可能ということになる。日本語の「あげる」に対して、話者へ向かう方向の授与（所有権の移動）が語彙化した「くれる」についても同様である。

日本語を含む東アジアの３言語を例に直示移動表現の体系を表７に表す（Uehara 2006b、澤田 2011）。

表７：中国語・韓国語・日本語における直示移動表現の体系の対照

移動のタイプ	例	中国語	韓国語	日本語
主体移動	来る	√	√	√
主体移動（＋様態）	走ってくる	√	√	√
使役移動(同伴移動)	連れて/持ってくる	√	√	√
使役移動(発送/発信)	送って/投げてくる	√（→給我）	？	√
所有権移動	(-て) くれる	ø	ø	√

(14)は日韓語の発送・発信（送ってくる）の例を示す（澤田 2011：182）。

(14) 日本語：太郎が私にボールを投げてきた。

韓国語：Kheyn-i　na-eykey　pol-ul　[tencyessta/*?tencye wassta].

ケン-が　私-に　ボール-を　投げた　投げてきた

日本語で「くれる」が用いられることにより物の受取人の一人称

代名詞の省略が可能となる例は、The Last Leaf とその対訳資料にも次の(15)のようなものが見られた。

(15)（英語） You may bring me a little broth now,
（日本語）さあ、スープをすこしちょうだい。
（台華語）現在你可以給我端點雞湯來,

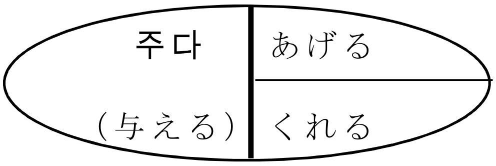
なお、「～てくれる」は、行為の恩恵の受け手としての話者を非明示でも想起させ、事態への参与の有無にかかわらず、出来事に対する感謝の気持ちなど話者・表現主体の情意も同時に示す。同資料の以下の文の例では、「くれる」の使用により、思い知る人が非明示ながら話者であることと同時に、（日本語訳だけ）そのことに対して話者が感謝の気持ちを持っていることも示している。

(16)（英語） Something has made that last leaf stay there to show me how wicked I was.
（日本語）わたしが、どんなにわるい子だったかを思い知らせるために、何かが、あの最後の一葉を、あそこに残しておいてくれたんだわ。
（台華語）冥冥中有股力量,讓那最後一片葉子一直待在那兒,好讓我知道自己有多邪惡。

実際、日本語では「てくれる」を使い、恩恵を受ける話者を指す(１人称)代名詞を非明示にすることが多い。以下は歌謡曲「涙そうそう」（作詞：森山良子、作曲：BEGIN）の冒頭の部分である。冒頭から全く非明示ながら動作対象は話者であることがわかる。

(17) 古いアルバムめくり　ありがとうって呟いた
いつもいつも胸の中　励ましてくれた人よ

同じ東アジアの言語で日本語と近似の文法体系を持つ韓国語には、日本語にはある授与動詞「あげる／くれる」の区別がない。「与える」という意味の「주다」１語で表す。



このことは(17)のような、「てくれる」を使うことによって前接動詞の表す行為の仕手も受け手も非明示となる日本語を、韓国語に直訳すると別の解釈を許すことにもなる。(18)は、日本留学で日本語を母語並みに話すようになった韓国語が母語の留学生(A)から聞いた、韓国にいる友人(B)との SNS のやり取りで実際起きたミスコミュニケーションの例である（実際のメッセージは韓国語で、以下は伝えたかった意味を日本語で表したものという）。

(18)　A：私は今先輩の寮に来てる。今料理を作ってくれてる。
　　　B：写真見せて！外国に行って色々自分で作れるようになったんだね！
　　　A：［しばらくして食事後］僕は皿洗いだけやったんだよ。

(18)の逆行転移（学習言語が母語の表現に影響すること）は、日本語で「てくれる」を使うことにより恩恵の受け手である「私」を通例非明示とすることと無関係ではない。

3.2.2.1　社会的直示（敬語）

移動とは異なるが、社会的直示とも言われる日本語の敬語も、一人称代名詞非明示の要因となる。同窓の友人との会話で「昨日Y先生にお目にかかったけど、相変わらずお元気そうだったよ。」などの発話が考えられる。

3.2.3　出来事の「知覚者抜き」記述

Iwasaki (1995)は、(19a)の英語表現が、(19b)の日本語表現に対応することがあると指摘している。後者を Uehara (1998)は「事態の知覚者抜き記述」(Perceiver-less descriptions of events)と呼び、英語の主語がその知覚行為ごと日本語で省略されるタイプの表現としている。

(19) a. 英語： I found a lady standing over there.
　　 b. 日本語： 向こうに女の人が立っていた。

この構文パターンは、実際日本語文としてよく使われる特徴的なものである。(20)は複文の例で、前件が知覚者の視点を導く行為を表し、後件が「知覚者抜き記述」であり全権で導かれた知覚者の視点の先に立ち現れる状景を表している。(21)は単文で現れる例で、それぞれ物と人や動物が、それらを探すという視点行動があった後に、その知覚者の視界に現れたという事態として表している。

(20) ドアを開けるとゾウがいた。
(21) あった！ ／ いた！

上の(20), (21)を、英語や中国語に直訳するとどうなるか。英語では find、中国語では「發現」などを使い(21)であれば「找到了。」であろう。注目すべきは、どれも他動詞であり、(21)の中国語の例でも話者は省略／非明示化されているが、日本語では文の表す事態に参与さえしていないことである。

「知覚者抜き」記述の知覚者は典型的には話者であるが、三人称の場合もあると Uehara (1998)はしている（perspective transfer）。本稿のケーススタディーの例(22)もその例である。

(22)（英語） When Sue awoke from an hour's sleep the next
　　morning, she found Johnsy with dull wide-open eyes

staring at the drawn green shade.

（日本語） 翌朝、スウが一時間ほど眠ってから目をさますと、ジョンジーは、生気のない目を大きく見開いて、おろされている緑色のシェードを、じっと見つめていた。

（台華語） 第二天早上，蘇從僅僅一小時的睡眠中醒來，發現瓊希眼睛睜得大大的，呆呆地望著放下的綠窗簾。

池上（2004）は、この「出来事の知覚者抜き記述」が日本語の和歌、そして「現在の日本語でも例には事欠かない」（池上 2004: 39：以下の例文とも）として、以下のような例を挙げている（(23)は和歌の例。(24)は現代日本語の小説とその英語訳の例。斜字体は池上(2004)による）。

(23) 田児の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける。（『万葉集』山部赤人）

(24) 見上げると，門の屋根が，斜めに突き出した瓦の先に，重たく薄暗い雲を支えていた。（芥川龍之介『羅生門』）

（英訳） Looking up, *he saw*, a fat, black cloud impale itself on the tips of the tiles jutting out from the roof of the gate. （T. Kojima 訳）

(25) その明くる晩も気になって覗きに行くと，依然として父は昨夜の通りにしていた。（谷崎潤一郎『少将滋幹の母』）

（英訳）...but the next night curiosity came over him again, and again he went to look and *saw* his father as on the proceeding night. （E. Seidensticker 訳）

以上のことから、日本語では一人称を中心に代名詞の省略が多いという表層の現象の奥に、その要因の一つとして、同じ事態をどのように捉えるか、どの部分を切り取り、どこから捉えるかについて一定の傾向があると言えよう。

４．認知言語学的アプローチ　一人称代名詞の意味論

認知言語学とは、言語の構造全般を一般的な認知機構と結びつけて理解しようとする言語研究のアプローチである。意味を指示対象と同一視する意味観を持つ他の多くの言語研究のアプローチと異なり、認知言語学においては、言語表現の意味とは「話者がいかなる対象をいかに認識し、表現したか」と規定されることになる（本多1994）。

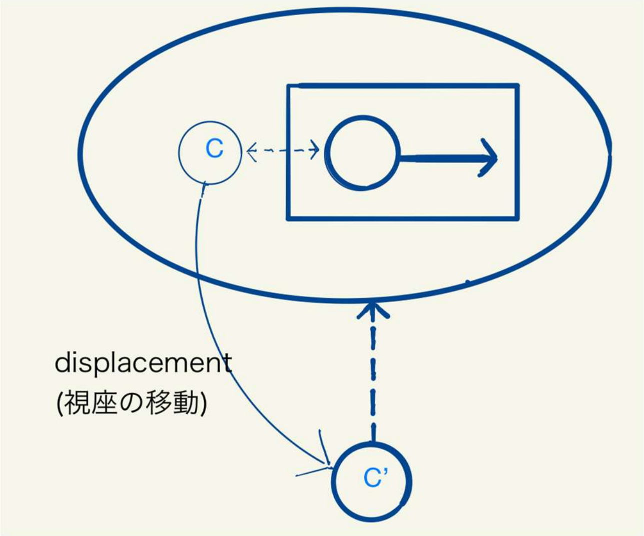
それでは、その認知言語学において、一人称代名詞の明示／非明示はそれぞれ何を表すのか。本多(1994)の、以下のような「一人称代名詞の意味論」を引用する。

> 一人称代名詞は、（観念的な分裂・移行を経た）知覚・認識者の＜見え＞の中に含まれる自己をその指示対象とする表現形式である。（本多 1994： 173）

上の主張は、次のような言語と知覚の平行関係に基づいている：「音形のある言語形式は知覚における＜見え＞を写しとったものに相当する。すなわち言語表現において音形のある言語形式によって明示的に指示することが可能なのは、＜見え＞の中に含まれるものに限られる。」（同 p. 172）。

人間はその直接経験としてその視界の＜見え＞の中に自分自身は見えない訳である。であるから、一人称代名詞の意味するものは、その指示対象としての自分自身が＜見え＞の中に含まれるということであり、そのことはすなわち、自らの直接の知覚体験の場に外置し自分自身をその視覚対象として見る（観念的に移行した先の）自己がいるということである。

この「観念的な自己分裂・移行」を Langacker （1985)は displacement（「視座の移動」（和訳は本多 （2005： 33)による）と呼び、以下のような図で表すことができる（下図は、中村(2003： 83)の Displaced mode of cognition（D-モード認知）を転載）：



C：認知主体（事象の体験者）

四角：認知主体の知覚する事象・見え

楕円：認知主体の実際の体験の場

C'：観念的に自己分裂し移行先にある認知主体

楕円：移行先にある自己の知覚する事象／見え

本稿では、上記のような認知主体の参与する事態を、視座の移動を経て自己をも客体的に捉える捉え方を、池上（2004)にならい「客観的事態把握」（あるいは単に「客観的把握」）と呼ぶ。対照的に、視座の移動を伴うことなく認知主体の参与する直接知覚体験するままに捉える捉え方を、「主観的事態把握」（または「主観的把握」）と呼ぶ。両者の池上（2006)による定義は以下のとおり：

主観的事態把握：話者が言語化しようとする事態の内に身を置き、当事者として体験的に事態把握する場合。実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は（心理的な自己投入を経て）問題の事態の中に入り込み、あたかもそこに臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握する。

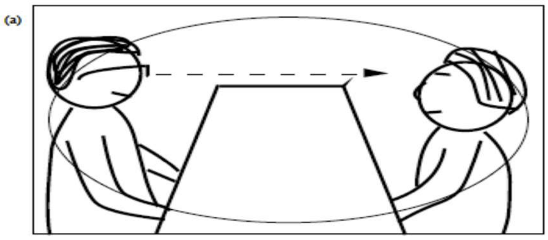
客観的事態把握：話者が言語化しようとする事態の外に身を置き、傍観者、ないし、観察者として客観的に事態把握をする場合。実際には問題の事態の内に身を置いている場合であっても、話者は（心理的な自己分裂を経て）「自らの分身の一つを事態の外に移動させ、そこから傍観者、ないし、観察者であるかのように（「自らのもう一つの分身が残ったままになっている事態を）外から客観的に事態把握する。

上の２つの捉え方は、認知主体が参与する客観的には同じ事態の

２つの捉え方であることに注意したい。ラネカー（Langacker 1985, 1990）の英語の例で考える。Langacker（1990）によると次の２文は、客観的には同じ位置関係の事態を表す一人称代名詞明示／非明示の２つの表現であり、(b)の方は「話者の目に映った状況を描写している」としている。

(23) a. Vanessa is sitting across the table from me.
　　b. Vanessa is sitting across the table.

(a)と(b)とで、(a)は表現の表す事態の中に話者自身が存在し、客観的な捉えを表していると言え、(b)は、話者自身の直接の知覚体験を表しており、主観的な捉えを表していると言えよう。両者の表現の意味、つまり話者の持つ「見え」をUehara（2006a)は下



客観的事態把握

主観的事態把握

のような図を用いて表している。

一人称代名詞の意味論に戻る。一人称代名詞の明示使用については、上の本多（1994）にあるように、客観的把握を意味する。よって、英語のように代名詞が省略されない言語、及び省略されても述部の人称表示でそれと同等の機能を有する言語においては、客観的な把握が典型的であると言うことができる（森 1998）。

では、一人称代名詞の非明示・省略は何を意味するか。これは、それだけでは、主観的把握を表すことにはならない。これまで見てきたように、述部形式で代名詞使用と同等の意味を持つ場合、また談話上の要因で省略されているだけの場合もあるからである。しかしながら、代名詞が省略可能な言語では、代名詞使用が義務的で客

観的把握が強要されることはなく、主観的把握が可能で容易である。特にその中でも、これまで見てきたように、一人称代名詞が非明示となる文法構造を有しそれが多用される日本語は、主観的把握にふさわしい、それを取りやすい言語であると言え、主観的な把握が典型的であると考えても問題はない。以上のことを基に、言語の事態把握の主観・客観のスケール上に言語を位置づけると図３のようになる。

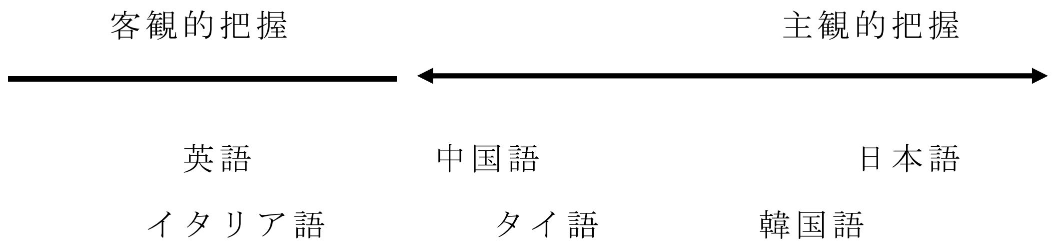


図３：事態把握の主観性のスケール

４．主観的把握と代名詞省略の周辺

日本語の主観的把握の傾向は、日本語の表現傾向及び上述した以外の文法構造にも関わり通底している。以下では、３つの面について述べる。

4.1　主観的把握の臨場感、体験をそのまま語る

主観的把握により、言語主体が自分の体験する事態をその臨場感、体験のままに語り、その評価や感想の言葉なしが多い。以下は童謡・唱歌の一つ『紅葉』（高野辰之作詞・岡野貞一作曲）の歌詞で、紅葉を見る誰かがその目に映るものをそのまま伝えている。

１. 秋の夕日に　照る山紅葉
濃いも薄いも　数ある中に
松を彩る　楓や蔦は
山のふもとの　裾模様

２. 谷の流れに　散り浮く紅葉
波に揺られて　離れて寄って
赤や黄色に　色さまざまに
水の上にも　織る錦

１番と２番の歌詞では、それぞれどのような紅葉をどこから（視座・立ち位置）見ているかが異なる（１番は山全体を遠くから、２番はその山に踏み入って）。表現の対象の捉えられ方が主体の持つ「見え」を表し、それにより主体の立ち位置までがわかるのである[8]。この歌詞では、紅葉の色様々を捉えそれらを「裾模様」「織る錦」と（に喩えて）捉えることにより、それらを目にしている主体の「美しい」との感動もその言葉なしで伝わると言ってよい。

「紅葉狩り」の言葉もある紅葉については同様のことが『百人一首』の紅葉の歌についても言える。以下に３首をあげる。

(24) ちはやぶる 神代も聞かず 竜田川 からくれなゐに 水くくるとは（在原業平朝臣）
(25) このたびは ぬさもとりあへず 手向山 紅葉の錦 神のまにまに（菅家）
(26) 小倉山 峰の紅葉葉 心あらば 今ひとたびの みゆき待たなむ（貞信公）

以上の３首のそれぞれ「作者が言いたいこと」（天野慶『百人一首おけいこ帖』朝日学生新聞社）は何かを、子供向けにわかりやすくした説明には「美しい」等の言葉が使われている。

(24’) 神様だって見たことないくらい、美しい景色だ！
(25’) お供えの代わりに素晴らしい紅葉の枝をどうぞ！
(26’) おーい、紅葉くん。もう少し美しいまま待っていて！

童謡『紅葉』と同様のことが、より最近のJ-POPでも『さくら』（作詞・作曲: 森山直太朗、御徒町凧）などにも見られる。また、情景を歌ったものではないが、「愛している」や「好き」の言葉を使わず思いを綴った歌『この広い野原いっぱい』（作詞：小薗江圭

[8] 本多(2005)による「エコロジカル・セルフ」の説明も参照されたい。

子・作曲：森山良子）なども、日本の歌には見られる。

4.2　状況没入

主観的把握をするということはその時の状況に没入（森 1998）するということである。日本語のその傾向は強く、過去の回想の際には、過去のその時点の状況に没入し、他者の状況の理解の際にはその他者に自己投入をする場合がある。「今・ここ・私」ではない時にもそうであるかのように捉えるということである。

4.2.1　過去の回想

直示動詞の使用の日中語間差異について取り上げる。(27)は、両言語間で見られる違いの１つである（下地 1997，古賀 2018）。

(27)(日本語)　王先生が(王先生の)研究室に[来る/*行く]ように言ってたよ。
（中国語）　王老師叫你到研究室[*来/去]。（下地 1997:136）

下地によると、日本語では、話し手が視点を主語の王先生に置き、それに対して、中国語では対話の現場に視点が置かれ、そこから離れる移動として"去”が用いられる。つまり、日本語は相対的視点で事象を眺める傾向が、中国語は固有的視点で事象を眺める傾向が強い(下地 2004:59)。これは本稿によると、日本語では王先生の発話の内容を述べる際にその場に表現主体が移行すると言える。

4.2.1　他者の共感（自己投入）

日本語の感覚などの内的状態を表す表現は体験者制約があるが、他者の感覚を表す際にその他者に自己投入（池上 2003）し、自分自身のように共感を表すことがある。(28)は相撲の実況中継しているアナウンサーの言葉である。

(28) ああっ、A 関、肩から落ちた。これは痛い。これは痛い。

4.3 ひとりごと的(聞き手に向けていない)

主観的把握のままで表現するというのは、聞き手に向けて形を整えていない、独り言的(池上 2006)であるということでもある。

日本人はひとりごとが多いと言われることがある(中川 2005 他)。以下は、井上(2013: 36)「動作にともなう独り言」からの引用である(括弧書きは上原による)。

> 何かを数えるとき、私は「一、二、三、四…」と言ってしまう。家を出る際も、「あそこは閉めた。あそこも閉めた」とつぶやきながら、指差し確認をする。物を探すときは「ええと、どこやったっけ」、何かを思い出すときは「ええと、何だったっけ」とつぶやいてしまう。
> ...(中国語母語話者の)妻はこの種の独り言はあまり言わない。

主観的把握の傾向の強さから来る日本語の、ひとりごと的として説明できる言語・文法現象や表現傾向は多い。

4.3.1 スピーチレベルシフトに現れる裸の文末形式

初対面の人の会話で、丁寧体のはずが、会話の途中で普通体が混じることがある。そのスタイルシフトの要因の一つに、咄嗟の発話で独り言的(聞き手に向けた発話でない)発話になるということがある(上原・福島 2004、以下の引用も)。(29)は、日本語教師間の共通語を話しているかについての発話で、初対面の会話での普通体の使用が可能なのは独り言と理解されるからである。

(29) A: 語尾に、関西の、関西アクセントが残ってますね。→
B: あ、そう、かもしれない。それとあのー、でも ウ は [wu] なんですよー、→

4.3.2　感覚を表す形容詞の語彙化

感覚を表す「痛い」「熱い」などの形容詞が、表出の機能で語彙化されており、聞き手目当ての表現とする場合は有標になる。その意味で中国語とは対照的である（徐 2006：54、以下の例文も）。

（不慣れな手つきの看護婦さんからいきなり注射を打たれて）
(30) 日本語：　いたっ／痛い！
　　 中国語：　哎呀！
（薬缶が熱いのを知らずに触ってしまったとき）
(31) 日本語：　あつっ／熱い！
　　 中国語：　哎呀！

中国語の「疼（痛い）」や「烫（熱い）」の形容詞もあるが、それらは(30)の場面で使ったとしたら、「自分の「痛い」という咄嗟の気持ちを表すというより、むしろ看護婦に対して今の注射はあまりにも下手であることを訴えて、日本語に直すと「痛いよ！」に相当する表現になる」と徐は述べている。薬缶の場合の「疼！」も同じで、「子供が薬缶に触れようとしたときに、触らないように注意するために発するのが普通であって、日本語に直すとやはり「熱いよ（触らないで）」という表現に近いのではないかと思う」としている。日本語の感覚形容詞はひとりごととして語彙化している。

4.3.3　敬語

動詞の形式に敬語があり、それは素材敬語と対者敬語に分けられる。そのうち素材敬語は、必ずしも聞き手に向けたものである必要はない。例えば、次のような文を日記に書くことが考えられる：

(33)・・先生には本当によくしていただいたものだ。だから外国へ旅立たれる前、一目だけでもお目にかかれてよかった。あの当時、あの方はご自分の分も十分になかったのにも拘らず、私に食

べるものを分けてくださっていたのだ。

敬意（感謝）の対象である先生が聞いていなくてもよいのである。

4.3.4　挨拶言葉（洪 2007）

「いただきます!」「ごちそうさまでした!」の挨拶言葉について「食前に料理を作ってくれた人や食材を育んだ自然に感謝の気持ちを込めて「いただきます」と言うことなど、食に関する日本人の慣習」（「和食がユネスコの無形文化遺産に」毎日新聞 2014 年 2 月 21 日版）とされる。ここに「自然に感謝」とあるように、この言葉は感謝する相手に聞かせる必要はない。

東アジア言語のうち食事前後のこの挨拶言葉を有する日韓語について洪（2007)は対照研究を行い、近似する両言語の言語行動の中で唯一大きく異なる点が現れたのが、小学生の給食の前後の挨拶言葉であった（給食前：日本 96.0%、韓国 30.2%）としている。洪は「日本人は感謝の対象の有無に関係なく習慣的にあいさつをしており、韓国人は実際に食事を提供してもらった人、つまり感謝の対象がいればその人にあいさつし、外食や給食のように特に感謝の対象がいない場合はあいさつをしない」（洪 2007: 41-42）と説明している。日本語の方がよりひとりごと的ということを示している。

4.3.5　言葉に関する言葉の意味範囲・用法の違い

斎藤(2016)は日英語の対訳コーパスを用い、英語の lie と日本語の「嘘」の意味用法の対応関係を調査し、英語の lie は「二人の対話における虚為と欺きである」のに対して、日本語の「嘘」は対話でなく独白であっても言葉として他者に発せられたものでなくても「信じられないこと」や「あるべき姿でないこと」を表し、「自分に嘘をつく」こともできるとした。lie とは異なり、「嘘」と概念化される事象が対者との対話を前提としていないことがわかる。

4.3.6　ひとりごとの歌謡曲

J-POP の歌詞の内容が、誰かに語りかけているのではない、日記に書くようなひとりごと的なものが多い。以下は『なごり雪』（作詞/作曲：伊勢正三）の１番の歌詞である。

汽車を待つ君の横で　僕は　　時計を気にしてる
季節はずれの雪が　　降ってる
「東京で見る雪は これが最後ね」と
さみしそうに 君がつぶやく
なごり雪も 降る時を知り　　ふざけすぎた 季節のあとで
今、春が来て君はきれいになった
去年よりずっと きれいになった

この１番の最後のサビの部分「今、、君はきれいになった」こそ「君」が聞いてよい、「君」に聞かせるべき言葉であるが、歌詞の最後に至るまで「僕」は無口である。「君」に聞かせることを目的としないひとりごととなっている。

童謡『赤とんぼ』などはもちろん、最近のJ-POPの『ヒロイン』（作詞/作曲：清水依与吏）などもひとりごと的な歌である。

５．まとめ

本稿では、いわゆる代名詞省略のうち、述部に人称標示（一致）のない代名詞省略現象を東アジア言語の特有・共有の特徴として挙げ、その特徴の意味を人称の区別を明確に言語慣習化・文法化していないものとした。さらに、その特徴を持つ東アジア言語間の異同点として、代名詞省略の程度差を挙げ、その要因として「主観的把握」の典型性を指摘した。「主観的把握」を典型とする日本語では、その言語の特徴とされる多くの言語現象や表現傾向が、その下に「主観的把握」が通底するものと考えられることを示した。

対訳資料：

英語原作：Porter, Sydney (O. Henry). "The Last Leaf" *The Pocket Book of O. Henry Stories*, （1948［初版 1905］）: 198-204

日本語訳：大久保康雄（訳）「最後の一葉」『0・ヘンリ短編集（三）』（1969）: 8-18.

台湾華語訳：王聖棻・魏婉琪（訳）「最後一片葉子」『哭完了就要笑啊：歐亨利短篇小説選集』(2018): 141-149.

参考文献

池上嘉彦、「言語における＜主観性＞と＜主観性＞の言語的指標(1)(2)」、『認知言語学論考』No.3、2003、1-49。No.4、2004、1-60。

池上嘉彦、「〈主観的把握〉とは何か」、『月刊言語』5 月号、2006、20-27。

井上優、『相席で黙っていられるかー日中言語行動比較論』、東京、岩波書店、2015。

上原聡、「主観性に関する言語の対照と類型」、澤田治美（編）『ひつじ意味論講座５：主観性と主体性』、東京、ひつじ書房、2011、69-91。

上原聡、「日本語の『人称制限』は『人称』制限ではない−内的状態述語における話者・概念化者・体験者を区別する」、『日本認知言語学会論文集』15、2015、112-124。

上原聡、「ラネカーの subjectivity 理論における「主体性」と「主観性」—言語類型論の観点から—」、中村芳久・上原聡（編）『ラネカーの（間）主観性とその展開』、東京、開拓社、2016。

上原聡・福島悦子、「自然談話における「裸の文末形式」の機能と用法」、『日本語教育論集：世界の日本語教育』第 14 号、2004、109-123。

王安、「感情表現における日中対照研究　ー感情の語り方と人称制限の普遍性に着目して」、『言語研究の諸相：研究の最前線』北海道大学出版会、2004、35-45。

木村英樹、「”他很高兴”」、『中国語学習 Q&A101』、東京、大修館書店、1991。

古賀悠太郎、『現代日本語の視点の研究:体系化と精緻化』、東京、ひつじ書房、2018。

斎藤珠代、「日本語の「嘘」の意味構造のNatural Semantic Metalanguageによる分析ーパラレルコーパスを通してー」、『日本認知言語学会論文集』No.16、2016、363-374。

澤田淳、「日本語のダイクシス表現と視点、主観性」、澤田治美（編）『ひつじ意味論講座５：主観性と主体性』、東京、ひつじ書房、2011、165-192。

下地早智子、「移動動詞に関わる『視点』の日中対照研究」、『中国語学』244、1997、132-140。

下地早智子、「日中両語における文法現象としての視点の差異:移動動詞・受身の表現・テンス/アスペクトの場合」、『神戸市外国語学研究』58、2004、59-75。

徐一平、「「熱烈歓迎」の意味論：日本語と中国語における感情移入について」、『月刊言語』2006年5月号、2006、52-57。

盛文忠、「日本語の主語と中国語の主語はどう違う？」、『月刊言語』2006年5月号、2006、58-61。

中村芳久、「主観性の言語学：主観性と文法構造・構文」、『認知文法論II』、東京、大修館書店、2004、3-51。

中川正之、『漢語からみえる世界と世間』、東京、岩波書店、2005。

本多啓、「見えない自分、言えない自分：言語にあらわれた自己知覚」、『現代思想』Vol.22-13、1994、168-177。

本多啓、『アフォーダンスの認知意味論―生態心理学から見た文法現象』、東京大学出版会、2005。

洪珉杓、『日韓の言語文化の理解』、東京、風間書房、2007。

Hall, E.T. *Beyond Culture.* Garden City, NY: Doubleday, 1976.

Iwasaki, Shoichi. *Subjectivity in Grammar and Discourse*. Amsterdam: John Benjamins, 1993.

Kuroda, S.-Y. "Where epistemology, style, and grammar meet: a case study from Japanese" In S. R. Anderson and P. Kiparsky (eds.), *A Festschrift for Morris Halle*. New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1973, 377-391.

Langacker, Ronald. "Observations and speculations on subjectivity" In John Haiman (ed.) *Iconicity in Syntax*. Amsterdam: John Benjamins, 1985, 109–150.

Langacker, Ronald. "Subjectification" *Cognitive Linguistics* l, 1990, 5-38.

Pereira, Ernei Ribeiro. *A Cross-Linguistic Investigation on Overt and Null Subjects*. Doctoral Dissertation, Graduate School of International Cultural Studies, Tohoku University, 2020.

Uehara, Satoshi. "Pronoun drop and perspective in Japanese" In Akatsuka, Hoji, Iwasaki, Sohn, and Strauss (eds.) *Japanese/Korean linguistics* 7, 1998, 275–289.

Uehara, Satoshi."Internal state predicates in Japanese: A cognitive approach" In June Luchjenbroers (ed.), *Cognitive Linguistics Investigations across Languages, Fields and Philosophical Boundaries*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, 2006a, 271-291.

Uehara, Satoshi. "Toward a typology of linguistic subjectivity: A cognitive and cross-linguistic approach to grammaticalized deixis" In Angeliki Athanasiadou, Costas Canakis, and Bert Cornillie (eds.), *Subjectification: Various Paths to Subjectivity*, Berlin: Mouton de Gruyter, 2006b, 75-117.

Uehara, Satoshi. "The cognitive theory of subjectivity in a cross-linguistic perspective: Zero 1st person pronouns in English, Thai and Japanese" In Miyamoto, Ono, Thepkanjana and Uehara (eds.) *Typological Studies on Languages in Thailand and Japan*, Hituzi Syobo Publishing, 2012, 119-136.

Uehara, Satoshi and Kingkarn Thepkanjana. "Internal state predicates in Japanese and Thai" In Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (Eds.) *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*, Mouton De Gruyter, 2018, 651-676.